

複数受験の効果

木田 宏

(日本学術振興会理事)

今年の国公立大学の入学試験は、受験機会を複数化した所に最も大きな改革があった。臨時教育審議会の第一次答申を受けてそれが発表された時は、選択の自由、個性重視、共通一次という偏差値体制の打破に繋がるとして、好感をもって迎えられた。殊に、受験機会の複数化が、東大、京大を筆頭とする東西のBA両グループに分かれて、旧七帝大を二つ受験できることになったことは、高く評価され、京大法学部が東大と同じBグループに入ろうとしたことは、大学エゴであるとして、批判的となった。

ところで、今年の結果は、色々の問題を提起している。早速その改善策も検討されているが、人文系、わけても法学部は、グループ分けを変えて、東大と同じBに入ろうとするものが多く、そのABの比率が一对六になりそうだという。そこで、いっそのこと、私学のように大学の自由に委ねたらよとの意見も出る始末である。大学の自治を標榜して、入試の自由化を進めたらどうなるか、今年の複数化の示す所は大きい。

複数化の直接の効果は、受験者数の倍増である。国公立大学の志願者の実員は、例年三十数万人であるが、今年は、六十

五万人の受験者があつた。一人が二度受験すれば、倍増するのは、当然である。平均の競争倍率は六・三倍となつたが、大学によっては、五十六倍の受験者が殺到したところがあつた。また、二十倍を超えた所も、八学部あつたと言われた。なお、私立大学の受験者は、二百五十八万人であり、その平均倍率は十倍にのぼると推計される。これで、自由化を進めたとときの状況を推測すると、国公立合わせ、四百万人近い受験者が入り乱れることであろう。

受験者が多くなれば、試験の出題、採点、選考が、大量処理になつてくる。綿密な選考をしようとするれば、受験者の数を絞る外はない。足切りを行うことも当然である。その足切りの数が十万人を超えたというので、問題になつたが、一方で個性を尊重する綿密な入試を求めながら、他方で足切りをするな、複数受験を行えというのは、矛盾も甚だしい。また、出願をして書類選考で足切りをされたら受験料を返せというのも、計算高い話である。

第三に、複数受験の結果、国立大学に偏差値の高い者がより多く入るようになった。東大京大に不合格となつても、そ

れに準ずるところに入学できる。その結果、私学に回つていた学力の高い者が、国立により多く残るようになる。名大は、前年より、合格点を大いに高めたと報ぜられている。この点のみを見れば、国立大学は学力の高い者をより多く確保することができたことになる。

しかし、このことは、学力の高い者、偏差値のいい者が優先的に学校の選択権を行使できるようになることの結果である。それゆえ、第四の現象として、入学辞退者の大きな流れとなつて、大学間により整然とした序列がつくようになる。少なくとも、学生の選択、即ち意識の上での序列化が進んで行く。東大京大の両方に合格した者のうち、多数が東大を選択することによつて、両大の間で偏差値に実際は何ほどの差がなくても、世間的な優先順位が流布され、序列化が拡大することになるのである。当局の発表によれば、今年は五万一千人の辞退者が出たという。入学定員の半数に及ぶ辞退者の流れが、この序列化の形成に寄与したわけである。

大学は学問の府であるから、学力即ち偏差値を主とした選考が行われるのは当然であろう。大量の受験生を処理する今日の学力試験の仕方では、記憶力中心の学力試験になることも避けられない。この偏差値一辺倒を改めようとして、共通一次の結果が出る前に受験校を選択させ、個性的な入試を期待した結果は、却つて偏差値依存を強め、偏差値による大学の

序列化を一層促進するということになつたのである。

第五として、複数受験は、経費の増加をきたすことになる。複数受験で「出費は軽く百万円」と報ぜられたが、十分あり得ることであろう。

今日のわが国の入試制度は、国公立を通じて大局的に考えてみれば、諸外国と比べて、大学の自治、選択の自由が最も大きい制度であると言える。受験生は、その物心両面にわたる負担に於いて、いくつもの大学、いくつもの学部を駆け巡る。その結果、偏差値による画一的な序列化が、大学界を支配し進行する。これが、わが国の入試問題と言われる現実である。そして、その背後に、少しでも社会的な名声のいい大学へという社会心理が動いていることは、見逃せない。

今回の改革は、受験機会の複数化へ一歩を進めたのであるが、それに伴う色々の問題を提示してくれた。自由選択、自由競争も、そこに何らかの規制がなければ、却つて混乱や画一をもたらすことになりかねない。国公立を含めてわが国の入試に、ある程度の規律を取り戻さなければならぬのではないであろうか。報道を通して知るのみであるが、今のまま推移すれば、世界に悪評の高いわが国の入試問題は、さらに混乱の度を深めるのではないかと憂慮されるのである。

(まだ ひろし)